第３回優秀会社史賞選考報告書

１９８２年6月１０日

優秀会社史賞選考委員会

優秀会社史賞選考委員会

（敬称略，５０音順）

委員長	東京大学名誉教授	中川　敬一郎
委　員	法政大学教授	伊牟田　敏充
	三井銀行常務取締役	後藤　新一
	日本経済新聞社 論説主幹	阪口　昭
	法政大学教授	下川　浩一
	成蹊大学教授	杉山　和雄
	東京大学助教授	大東　英祐
	法政大学教授	一寸木　俊昭
	経済広報センター常務理事	長崎　男幸
	東京大学教授	山崎　広明
	明治大学教授	由井　常彦
	一橋大学教授	米川　伸一

事務局：財団法人　日本経営史研究所

第３回優秀会社史賞入賞作品

（社名，５０音順）

優秀会社史賞

東京海上火災保険株式会社百年史（上・下）

富士銀行百年史

（北越銀行）創業百年史

特別賞

世界への歩み　トヨタ自販３０年史

ブリヂストンタイヤ株式会社五十年史

明治生命百年史

第３回　優秀会社史賞候補作品

（社名，５０音順）

沖電気１００年のあゆみ

倉庫精練史

歴史に翔ける　　三洋証券七十年史

四国銀行百年史

東京海上火災保険株式会社百年史（上・下）

世界への歩み　　トヨタ自販３０年史

ＮＩＳＳＡＮ　ＤＡＴＳＵＮ

五十年史　　日本農薬株式会社

富士銀行百年史

ブリヂストンタイヤ株式会社五十年史

福井銀行八十年史

創業百年史　　北越銀行

丸善百年史

三菱化成社史

三菱電機社史　　創立６０年

明治生命百年史

安田生命百年史

社史　　合併より十五年（山下新日本汽船）

創業百年史　　山梨中央銀行

目　　次

第３回　優秀会社史賞入賞作品 …… 1
第３回　優秀会社史賞候補作品 …… 2
第３回　優秀会社史賞選考報告 …… 5
Ⅰ．入賞作品選評 …… 15
〔優秀会社史賞〕
東京海上火災保険株式会社百年史（上・下）…… 17
富士銀行百年史…… 20
創業百年　北越銀行…… 22
〔特　別　賞〕
世界への歩み　トヨタ自販３０年史…… 24
ブリヂストンタイヤ株式会社五十年史…… 26
明治生命百年史…… 29
Ⅱ．候補作品選評
沖電気１００年のあゆみ…… 35
倉庫精練史…… 38
歴史に翔ける　三洋証券七十年史…… 41
四国銀行百年史…… 44
NISSAN DATSUN …… 47
五十年史　日本農薬株式会社…… 48
福井銀行八十年史…… 51
丸善百年史…… 53
三菱化成社史…… 57
三菱電機社史　創立６０年 …… 61
安田生命百年史…… 64
社史ー合併より十五年（山下新日本汽船）…… 66
創業百年史　山梨中央銀行 …… 69

第３回優秀会社史賞選考報告

―― 選考の経過ならびに総評 ――

1. 選考の経過

1）選考の対象

今回の選考の対象とした会社史は，昭和５５，５６両年度に刊行されたものを原則とし，これに５７年度刊行分で前回の対象からもれていたものも加えた。収集は専門図書館協議会が作成した「社史・経済団体史総合目録」によって日本経営史研究所が行なった。選考開始までに入手しえなかったものもあったが，収集会社史は１８１点にのぼり，１年当りの平均刊行点数では今回が最高を記録した。

2）選考の手順

まず，経営史を専攻する若手研究者と経営史研究所スタッフが協力して第１次選考を行ない，選考委員会の選考対象とする候補作品を決定した。選考委員会では，候補作品ごとに２名もしくは３名の書評責任を定め，後日書評をもち寄って全員討議にかけ入賞作品を決定した。

3）第１次選考

過去２回の選考経過を反省し，今回は候補作品を２０点以内に絞り，選考委員会での個々の候補作品に対するより深い検討を可能にするという方針を採った。この場合，優秀会社史賞候補と特別賞候補の枠が問題となり，前者１０数点，後者数点を一応の目やすにおいたが，従来のように特別賞の評価基準が，①ハンディサイズで読ませる工夫，③経営者伝記としても優れたもの，②資料の収録や目で見る歴史など企画面にユニークさのうかがえるもの，④その会社の特定部門史として優れている，⑤新しい産業，特殊な業種の理解に役立つ等々ー相互に比較困難なままでは点数を絞ることがむずかしく，今回は一定のボリュームを持ち，総合性と実証の意図の感じられるものは，第一次選考では優秀会社史賞のグループに一括して選び，特別賞とするか否かの最終判断は内容に則して本選考で検討してもらうこととした。したがって，特別賞には上記のう

ち①の基準のみが採用された。

優秀会社史賞候補については，前回の選考方法を踏襲し，経営史としての総合性と実証性を重視した。すなわち，一つの経営体の歴史として統一した理解が可能な構成と内容を備えていること，一つは資料に基づく実証努力による客観的記述になっていること，の二点をチェックポイントとした。このため，総論（沿革史）と各論（機能別部門史，事業別部門史）という構成のものには，やや厳しい評価となったが，社内各部の分担執筆によるメーカーの会社史には，こうした構成をとる傾向がしばしばみられたこともあって，再度この問題に関する選考委員会の意見を求めることとした。

さらに，銀行，保険，証券などの業種と，そのほかの一般産業に属する会社史の比較基準も問題になった。経営機能に決定的な差異のある両分野の会社史の優劣を判断することの困難が，今回候補点数を絞ったことにより表面化したともいえる。われわれの「経営史」的尺度でみるかぎり，どうしても金融関連業種の会社史の方が全般に水準が高いという結果になった。しかし，業種ごとに「経営史」的会社史の編纂には難易があろうから，ある程度両分野に枠を定めて候補作品を選出することが妥当ではないかということになった。

なお，このほか政府系企業が発行したものや，資料集については今回も選考の対象から除外した。

以上の点を考慮しながら，第１次選考担当者の間で討議を重ねた結果，つぎの１６点を候補作品として選考委員会に提出することとした。

優秀会社史賞候補として『四国銀行百年史』，『倉庫精練史』，『東京海上火災保険株式会社百年史』（上・下），『世界への歩み　トヨタ自販30年史』，『五十年史』（日本農薬），『福井銀行八十年史』，『富士銀行百年史』，『創業百年史』（北越銀行），『丸善百年史』，『三菱化成社史』，『社史一合併より十五年』（山下新日本汽船），『創業百年史』（山梨中央銀行）の１２点。

特別賞候補としては『沖電気１００年のあゆみ』，『歴史に翔ける―三洋証券七十年史』，『ブリヂストンタイヤ五十年史』，『明治生命百年史』の４点。

このほかに，候補作品として取上げるか否かの決定を本選考に委ねる検討作品として『小田急五十年史』，『ヂーゼル機器４０年史』，『日産車体三十年史』，『三菱電機社史』，『安田生命百年史』，『山形銀行八十年史』の６点を加えた。

これらのほかにも，第１次選考で注目されたものにふれておくと，まず出版，書店関係で『丸善百年史』以外にも特色ある会社史が刊行されている。『三省堂書店百年史』，『近代教科書の変遷―東京書籍七十年史』，『有斐閣百年史』などで，いずれも文化史的な色彩が濃く，そうしたものの評価を求める意味もあって『丸善百年史』を候補に入れた。沿革編―部門編的構成をとっていたものの代表例に『三菱電機社史』のほか『三洋電機三十年の歩み』，『三菱神戸造船所七十五年史』があり，会社の特定部門を扱ったものとしては『昭和電工石油化学発展史』があった。見せる工夫が成功しているものでは『こころ・わざ，かたち・わざ』（戸田建設），『SOUND CREATOR PIONEER』。このほか『川鉄商事２５年の歩み』，『京浜急行八十年史』，『大協石油四十年史』，『ダイニック６０年史』，『帝国化工６０年史』，『三菱石油五十年史』なども注目された。

なお，一企業の特定事業所に限定したものであったため選考対象からはずれた『八幡製鉄所八十年史』は，ここで簡単に紹介しておかなければならない。同書は「総合史」「部門史上」「同下」「資料編」の４巻からなり，内容も充実している。官営，日鉄，八幡，新日鉄の各会社時代別に同所の歴史をたどった「総合史」は，それなりに十分に整備された８０年の通史として有用であり，製造技術や生産，経理，労務の各管理面の発達過程を記録した「部門史」は，優れた経営史料である。また八幡，富士，新日鉄の３社の歴史を，それぞれ分冊に構成した『炎とともに』も刊行されている。

4）候補作品の決定

上記の第１次選考の報告をもとに選考委員会で討議された結果，検討作品から『安田生命百年史』と『三菱電機社史』が優秀会社史賞候補に追加され

追加された。さらに，海外で出版された日本の会社史として"NISSAN／DATSUN—A History of Nissan Motor Corporation U.S.A.，1960—1980"が話題にのぼった。この種の出版はまだごく少ないことから，賞の対象にするにはいましばらく検討期間をおくことになったが，将来こうした研究，出版が多くなることを期待する趣旨から今回は前記作品の書評，討議だけを試みることになった。

5）選考委員の執筆作品

今回候補作のなかに，選考委員がその執筆に関わったものがあり，委員会構成と討議方法について検討された。第１回の選考（５３年）の際に，共同執筆である場合には当該作品も対象とすることにしており，今回もそうした作品を除外したり執筆者を委員からはずす必要はないが，より公正を期すため当該作品の審査を行なう時点で関係する委員は退席した方がよい，ということになった。これに従って『東京海上火災保険株式会社百年史』（上・下）の審査時には杉山，山崎，由井の各委員，『明治生命百年史』の審査時には杉山委員が退席された。

6）入賞作品の決定

以上１８点の候補作品は，それぞれ複数の委員によって精読され，書評を持ちよってさらに全員による討議を行ない，以下の入賞作品を決定した。入賞作品間の順位は今回も付されなかった。

優秀会社賞（五十音順）

『東京海上火災保険株式会社百年史』（上・下）

『富士銀行百年史』

『創業百年史』（北越銀行）

特　別　賞

『世界への歩み　トヨタ自販３０年史』

『ブリヂストンタイヤ五十年史』

『明治生命百年史』

2. 総　　評

候補作品でみるかぎり「経営史」として明確な意図のもとに執筆された会社史がかなり多くなったことが，今回の第一の特徴であろう。経営理念なり経営方針まで取り上げ，それを経営活動のなかに位置づける試みがなされていることも，その一つの表われである。それによって企業の主体性が前面に出るようになった。さらに一般経済や業界動向をふまえ，経営方針を媒介項におき，組織，事業，業績へ展開するという経営史的枠組みによって，企業の発展過程を記述しようとするものがふえてきている。しかも資料に基づく実証的裏付けをも伴って，可能な範囲での社内情報の公開が進んできたように感じられる。

第二に，戦前から戦後におよぶ場合，第２次大戦後の叙述のむずかしさである。とくに，経営を動かす人と経営とのかかわりが，時代を下るにともなってどうしても薄れていくため，企業活動の手応えといったものが伝わってこない。企業規模が巨大化し，組織としての性格が強まっているのであるから，戦前と同じ手法でそれを期待することに無理があるともいえよう。そうした時代の企業活動のダイナミズムを表現するための，会社史としての新しい構成と記述上の工夫が必要である。その意味で，今回入賞した『東京海上火災保険株式会社百年史』（下巻）は，戦後経営史の貴重な業績となった。

最後に，地方銀行史に今回も高い水準のものが多かった。地方史に関する豊かな研究の蓄積が寄与しているにちがいない。ただ，いずれの地方銀行史も，地域経済との関連，合同政策，前身銀行史に重点をおくという編集方針が採用されており，それ自身非難されるものではないが，やや画一的印象は拭えない。

また総論として沿革史をおき，これとは別に事業部門別あるいは経営機能別

（生産，営業，労務など）の各論を設ける構成についてコメントしておくと，構成だけで形式的に否定されるわけではもちろんない。たとえ，そうした構成をとった場合でも，総論と各論の間に経営諸機能がもつ有機的な関連や，個別事業と経営全体の相互規定性が正しく理解できるよう配慮されていればよいわけである。しかし多くの場合，この条件が満たされていないだけでなく，各論を分離したため沿革史が表面的な記述に流れたり，各論内での精粗，重複がみられることが少なくない。むしろ，こうした編別構成には，統一された編集方針のもとに特別の工夫が必要なはずである。

なお，ここで特に記しておきたいことは，今回の候補作のなかに『富士銀行百年史』や『安田生命百年史』など，４９年に刊行された『安田保善社とその関係事業史』の成果が生かされた，すぐれたものがあったことである。地方史研究といい，この事業史といい，こうした研究の集積によって会社史の内容の充実が可能になっていることは，まことに喜ばしいことである。

1）優秀会社史賞

『東京海上火災保険株式会社百年史』（上・下）：経営史として明確な方法意識のもとに,豊富な社内資料を駆使しながら詳細に，しかも客観的に叙述されている点で出色の社史である。「上巻」では，同社の既刊社史に比べて内容のバランスなどが大幅に改善されており，「下巻」はむずかしい戦後経営史に本格的に取組み，優れた成果をあげている。社内情報の公開の面でも，業界トップ企業にふさわしい役割を果している。

『富士銀行百年史』：社史の内容に関するかぎり，しばらく地方銀行に対して後塵を拝していた都市銀行のなかで，ひさびさの力作と評価された。数多い同行関連の既刊社史をふまえながら，さらに改訂充実を図っている。百年を通した編集方針の統一が配慮されており，大部の構成のわりには読みやすい。また営業店史と資料・年表を収録した別巻には，学問上利用価値の高いものが多い。

『創業百年史』（北越銀行）：全般に水準の高い地方銀行史のなかから，そ

の代表として選ばれた。母体の二行が合併するまでを両行同程度に扱うことで，両行の性格の差異を明確にしながら，新潟県が一県二行となった様相を明らかにしている。さらに両行に合併された前身１７行についても，それぞれ沿革史をまとめており，地元産業とのつながりを詳しく跡づけ各行の主要勘定も付している。

惜しくも入賞は逸したが『創業百年史』（山梨中央銀行）と『社史―合併より十五年』（山下新日本汽船）も議論の的となった。ことに山梨中央銀行のものは，内容のレベルにおいて入賞した北越銀行のそれに劣らないと評価された。ただ，二つの前身銀行の本史における扱い方で委員の評価が分かれ，県を代表する銀行として一方（有信銀行）をあまりに簡単にすましていることが疑問とされた。山下新日本汽船の『社史』は，集約後の海運会社で初めての社史として注目されたが，分担執筆された各章間の内容と文体にバラツキや重複が指摘された。また『丸善百年史』は，あまりに文化史に傾いており，会社史を経営史として評価したい本賞の立場からは遠いという意見が支配的であった。

2）特　別　賞

『世界への歩み　　トヨタ自販３０年史』：同社には，すでに高い評価を得ている２０年史『モータリゼーションとともに』があることから，それとの比較が話題にのぼったが，本書は前社史との重複を避けながら新しい視点も導入しており，独立した価値が認められた。ただ，財務分析やトヨタ自工との関連が弱く総合性に欠けるとされ，優れたマーケティング史として特別賞の対象となった。

『ブリヂストンタイヤ五十年史』：中量級の社史として，まとまりのある社史である。量産量販体制の形成過程を軸におきながら，過不足なく描かれており，失敗例にもふれている。社内執筆によるものとしは客観的叙述に留意されているが，もっと会社の特色を強調するなど，読みやすさにはもう一工夫ほしい。

『明治生命百年史』：一般読者を想定した読みやすさと同時に，実証的条件も満たした社史である。資産運用を含む財務分析も簡にして要をえている。ただ，前半部分と後半部分でトーンが大きく異なる点が問題とされ，同社から同時に企画刊行された『近代生命保険生成史料』と合わせて入賞となった。

読みやすさという点では『沖電気１００年のあゆみ』があげられたが，やはり経営史としては図表なども利用した実証がいまひとつ望まれた。

I. 入賞作品選評

〔優秀会社史賞〕

〔特別賞〕

優秀会社史賞

『東京海上火災保険株式会社百年史』上・下
発行・東京海上火災保険株式会社
２６.５×１９cm，上巻７７５Ｐ．下巻１０３３Ｐ，資料上巻１７９Ｐ，下巻２００Ｐ，（上・下巻とも年表．参考文献リスト，索引をふくむ）．上巻昭和５４年８月，下巻同５７年３月刊

選評Ⅰ

上・下２巻のこの大著は，４名の専門的経営史学者によって執筆された本格的な社史であり，損保企業史の代表作としてのみでなく，わが国における社史の水準の向上の歴史に照してみても画期的な業績である。上巻は，３名の経営史家の分担執筆により，東京海上保険の創業から昭和１９年の明治火災海上，三菱海上火災との合併までの発展を，七つの時期区分にもとづき，株主総会や取締役会の記録など社内資料を可及的に利用しながら見事に取纒めている。特に明治期におけるイギリス営業の整理や，その後の東京海上の社業改革など日本における損保事業の確立過程についての叙述は，経営史的に見ても極めて興味深く貴重な業績と言えよう。また戦後をまとめた下巻は山崎広明氏の単独執筆であるが，戦後インフレ，戦後復興，第１次および第２次高度成長，転換期の５期を５人の歴代社長のリーダーシップにうまく結びつけ，しかも各期を日本経済と損保業界，経営方針と経営組織，保険取引，資産運用，業績の推移の５節にわかち，確固とした経営史的枠組にもとづいて会社の発展を追究しようとしている姿勢は高く評価さるべきであろう。特に，各時期の社長の挨拶や訓示を整理して，その時期の経営理念，経営方針を確認し，そのうえで各期の事業の発展を記述するという工夫がこらされていること，また社内諸会議での経営者の発言，部長会議議事録，各業務部資料，回顧談資料，東海月報など社内資料を豊富に利用し，しかもそれらの出典を明確に注記するなど，本格的な社史をめざしての執筆者の努力には敬服のほかない。欲を言えば，恐らく確立した経営史の枠組によって収集された史実が膨大なものになり，その取捨選択は

容易でなかったと思われるが，史実の軽重に従って叙述内容の整理にもう一工夫あれば，さらに読みやすい社史にもなったであろうことが惜しまれる。

選評Ⅱ

上・下２巻にわたる大書であり，編集方針は「激しく変化する時代の諸相を背景に，可能な限り実証的かつ客観的に営業経営の発展過程を記述する」こととしている。一方，本書は経営史の専門学者が，学問的立場から実証的，客観的に会社経営の歩みを分析，評価したものである。

会社創業の経緯にはじまり，明治２０年なかごろの東京海上は，海外はイギリス営業の失敗，国内は有力競争会社の出現によって打撃を受けるが，各務一平生のコンビによって，社運の回復に努め，中興の祖といわれるほどの活躍をするが，これが史実にもとづいて，活写されている。戦後の混乱から会社再建の経過も詳細をきわめている。とくに，戦後は歴代社長の経営方針とその展開が具体的に述べられていることが，本書の大きな特色である。

貸借対照表などの資料，年表なども完備されている。本書は，経営史の専門学者による東京海上という企業経営の歴史的研究の成果であり，そのゆえに実証的かつ客観的である。企業の年史は，この編集方針が貫ぬかるべきである。

卒直に言って，総じて企業の年史は銀行の年史よりやや劣るといえるが，本書はすぐれた銀行の年史にまさるとも劣ることはなかろう。

選評Ⅲ

本書は，わが国損保業界のトップである東京海上火災保険会社の社史であり，トップ企業にふさわしい量と質を備えた100年史である。上下２冊にわかれ，それぞれ経営史の専門家の執筆になり，豊富な史料と客観的な筆致で詳細な記述がなされている。

とくに，第２次大戦後を対象とする下巻は本文のみで８００頁を超え，５章に分けて，各章は日本経済，損保業界，自社の経営方針と経営組織，保険

取引，資産運用，業績の推移にわけられている（ただし，第1章のみ「戦後改革と東京海上」の節が入っている）。この構成は，損保会社の社史としてはオーソドックスなものと考えられ，間然とするところがない。

このようなオーソドックスな構成で，史料・計数が豊富であれば，重量感で胃にもたれるような気もしてくるが，特定のトピックをとりあげて読むならば面白さは十分にある。例えば，第1章第3節戦後改革と東京海上は，財閥解体・集中排除について新しい史料を提示しており，現代史の専門家が読んでも極めて興味深いと思われる。また，第4章第2節の本社ビル建設をめぐる美観論争も面白い。

特徴としては，社内史料のディスクロージャーが，かなり行なわれていると思われること，トップ企業としての眼から業界動向を記述していること，計数に他の社史にないようなものが含まれていて，諸経営政策の裏づけが与えられていることなどを挙げうる。また，本文の使用資料に注記を施して，出所を明らかにしていることも著作として正しい処理で，これまでの多くの社史には見られなかったものである。なお下巻の末尾に，上巻の正誤が記されているのも，社史としては異例ではあるが，勇気ある処置と評価したい。

優秀会社史賞

『富士銀行百年史』

発行：株式会社富士銀行

２６.５×１９cm，本巻１４００Ｐ，別巻５３７Ｐ（営業店史，年表ふくむ），昭和５７年３月刊

選評Ⅰ

本巻・別巻合せて２０００ページにおよぶ浩瀚な社史である。しかし全体に読みやすい。富士銀行史に関して，これまでに『安田銀行六十年誌』『富士銀行七十年誌』『富士銀行八十年史』が刊行されているが，これらに比較して本書には次のような特徴がみられる。

第１に戦前期について，安田関係銀行の形成と展開に関する記述が詳しい。『安田善次郎伝資料』をはじめ興味ぶかい史料が利用されている。

第２に，富士銀行の前身銀行のメインたる安田銀行と第三銀行の経営的性格の差異について，新しい知見が加えられている。第３に，銀行経営や銀行合同に関する安田善次郎の考え方にまで立入った記述がみられる。

第４に，大正１２年の安田系銀行の大合同について詳細な考察が加えられている。とくに，推進者たる結城豊太郎の合同構想や，合同後の諸施策を紹介している。既刊の『安田保善社とその関係事業史』とともに，結城にたいして一層客観的な評価がなされている点は，歓迎されよう。

第５に，戦前と戦後の叙述が適切なバランスをもって構成されている。第６に，資料篇たる別巻も充実しており，学術上利用価値が高い。とくに安田銀行，第三国立銀行および第三銀行の主要勘定が表示されており，大変に有益である。それだけに若干の欠落が惜しまれる。

本書は，上述のように秀れた作品であるが，注文がないわけではない。たとえば，被合併銀行に関する史料や叙述が全般的に少ない。前述したように，それが本書の特徴の一つではあるが，秀れた地方銀行史を想起するとき，その感が強い。

また安田保善社と安田銀行の関連，あるいは芙蓉系企業と富士銀行の関連についても，立入った考察が加えられていたならば，本書の価値はより高められたであろう。

選評Ⅱ

久しく刊行が待たれた１００年史である。過去『安田銀行六十年誌』，『富士銀行七十年誌』，『富士銀行八十年史』があり，さらに『安田保善社とその関係事業史』が刊行されているが，本書はこれら既刊の年史を十分に再検討し，誤りを訂正し；より充実をはかっている。内容的にも１００年間を一貫させており，編集の態度・方法においても統一され，１００年史にふさわしいオーソドックスな社史となっている。第三国立銀行との関係，安田系諸銀行の発展と統合の経緯，戦後の富士銀行の発展など，経済金融情勢を背景に平易かつ過不足なく描かれている。

また本書の価値は，安田銀行，第三国立銀行の決算諸表および支店小史を内容とした五百数十ページにわたる資料集によって，より高いものとなっている。とくに設立いらいの安田銀行，第三国立銀行（のちの第三銀行）の決算諸表は，金融史，財閥史の研究者によって，その公開が久しく望まれていたもので，ここに発表された意義は大きい。

本書は，以上のようにバランスのとれた１００年史と実証研究のための資料集とによって，一つの銀行史のモデルといえる。しかしあえて不満を述べるとしたら，大銀行の歴史に共通したことではあるが，貸出についての分析を欠き，意思決定など政策の記述に乏しく，表面的な印象を払拭できないことであろう。

優秀会社史賞

『創業百年史』

発行：株式会社北越銀行

２６.５×１９cm，１０３９Ｐ，資料３１９Ｐ，(年表，参考文献リストふくむ，索引なし)，昭和５５年９月刊

選評Ⅰ

本書の編集方針は，①地域経済，地域産業の発展過程とのかかわりで銀行の歴史的展開をとらえ，その役割，経営の特質を明らかにすること，②六十九，長岡両行はもちろんのこと，両行が合併，買収した前身諸銀行の沿革を探ること，としている。

昭和１７年１２月，六十九，長岡銀行が長岡六十九銀行とし新立合併するまでの序編に４６０ページを割き，そのうち前身銀行分に１３６ページを割いていることに，編集方針が具体的に示されている。これによって，監修者の朝倉考吉氏が「明治期から大正初期までに設立されたわが国の被合併銀行の実体解明，とくに運用資金源の解明に光を与えた」といえよう。また，六十九，長岡両行の性格も浮彫りにされている。

太平洋戦争下の「一県一行主義」のはげしい銀行合併の嵐のなかで，新潟県は２行となった。この事情が詳述されており，新潟県が大県であっただけでなく，「長岡市民，市内商工業者の燃え上がる情熱と，それを受けた山本五十六，小原直をはじめとする長岡出身有力者の熱烈な郷土愛が一丸となって，結実したものであることを忘れてはならない」と述べている。

貸借対照表をはじめとして財務諸表も整備されており，最近数多く刊行された銀行史のなかで，かなり高い水準である。

選評Ⅱ

学術的にみて高い水準の社史である。何よりも，北越銀行の母体をなす六十九，長岡両銀行に焦点をあわせ，創立以来の両行の株主層，経営政策およ

び営業地盤等の特徴を対比的に叙述しており，両行の性格上の差異が，親銀行との関連をふくめて鮮かに読みとれる。

第２に，一県一行主義に反して，長岡に本店をおく長岡六十九銀行を設立させるために払った地元財界等の努力を解明した。

第３に，被合併銀行１７行についても，その歴史を入念に記録している。これによって，明治期における銀行類似会社の内容がかなり明らかにされている。第４に六十九，長岡両銀行はもちろん，被合併銀行１７行の業務活動を地元産業との関連から明らかにしようとする姿勢が強い。

第５に，六十九，長岡両銀行について支店別の預貸金額まで収録し，かつ被合併銀行については各期ごとの主要勘定を表示している。これによって，地方の中小銀行の資金源泉の性格等を知ることができる。

上述の点から本書は学界に寄与するところが大きいと思われる。

望蜀の感を記すと，第１に「序論」が明治，大正，昭和という章別構成をとっており，景気循環と対応して銀行がどのように活動してきたかの印象を弱めている。

第２に，六十九，長岡両銀行の性格上の差異を強調するあまり，両行における大株主層の相互乗り入れや，営業地盤の重複化についての考察が乏しい点である。両行の合併の契機は，第四銀行を中心とする銀行合同への対抗にあったとはいえ，両行が同一都市に存在するという以上の類似性をもっていたことにあるのではないか。

なお本書には，収集・利用された史料の豊富が読みとれるだけに，収集された社内史料のリストが欲しかった。

総じて学術的に価値ある社史の一つといえよう。

特別賞

『世界への歩み　　トヨタ自販３０年史』

発行：トヨタ自動車販売株式会社

２８.５×２１.５*cm*，本巻６１２Ｐ（索引あり），別巻資料２１４Ｐ（年表ふくむ），昭和５５年１２月刊。

選評Ⅰ

本社史は，トヨタ自販２０年史として刊行された『モータリゼーションとともに』の続編として編さんされたものである。その編さんの方針としては，企業の主体性を前面に出した経営史的叙述とすること，ならびにマーケティングの側面に重点をおくこと，そして２０年史で取扱った部分は極力これを圧縮し，その後の１０年間にウエートを置くことが確認されて作業が進められている。このような編さんの基本的意図は，いちおう形式的には守られており，２０年史のハイライトであった工販分離の経過や，自販組織のユニークなマーケティング会社としての基盤づくりと神谷イズムの確立の経過については，その要点を第１編「創業と基盤づくり」で簡潔に整理してまとめている。第２編「積極政策の展開と国際企業への成長」では，時期的には２０年史と重複する部分でありながら，海外マーケティングの内容と不変部門，とくに部品供給体制やサービス体制の拡充と経営管理の近代化について，内容をより充実した序述がなされている。第３編「内外経営環境の潮流変化のなかで」ではモータリゼーションの高普及時代における国内，海外市場における対応，ならびにリコール車問題，排ガス規制，交通安全問題など社会環境変化に対するトヨタの発想と対応が客観的に描かれている。第４編では，石油危機と安定成長時代に入ってからの国内市場対策，輸出の増加と国際環境の激変が分析されていて，第五編「新しい時代へ向けて」における，８０年代へ向けての抱負につながっている。全体的に，よくまとまった社史として評価できるが，２０年史の内容と水準が極めて高かったために，それと比較した場合にその後１０年間のトヨタ自販の歩みの核心部分が何であったの

か，とくに神谷イズムは，この時期にどのように展開したかが，かならずしも明確に伝ってこないうらみがある。経営史的叙述を前面に出し，マーケティングの側面に重点をおく方針でありながら，その核心をなす戦略や理念よりも，事業展開の内容の叙述にのみ，かたよった傾向がみられ，これと対照的にリコール問題や公害対策，交通安全問題など社会環境変化をめぐる経過と，トヨタの立場や貿易摩擦問題についての叙述は明快で，かつ客観的である。概して当社史の評価をなすに当っては，２０年史との関連をどう評価するかが重大な岐れ目になると思われる。自動車マーケティングの先駆的業績として，学問的にも価値の高い２０年史の成果をも含めて評価するなら，これは当然優れた社史の名に価するであろう。

選評Ⅱ

本書は，いわばトヨタ自動車販売史であり，トヨタ車の発想から説きおこし，トヨタ自販がトヨタ自工から分離した昭和２５年以降のトヨタ製の自動車（とくに乗用車）の販売活動が，戦略，組織，サービスの各部面にわたって年代的に詳しく記述されている。執筆は内部の担当者によっており，読みやすく，わかりやすい。経済動向，社会風俗，同業他社の販売動向，自動車に対する社会的意識の変化，輸出への取り組みなども記述されており，戦後自動車販売史としても優れた内容になっている。資料は別冊になっており，トヨタ自販，業界，環境（含公害問題）にわたって多くの情報を提供している。年表も，それぞれ項目を立て，内容的に詳しい。トヨタ自販が有終の美を飾った社史といえる。

しかし，本史の記述はヒト（経営者），モノ（自動車），組織（経営組織と販売組織）を中心としており，カネ（資金）とトヨタ自工との内部的な関連についての説明が乏しい。社史とは何かという根本的な問題にかかわるが，本書は販売史に力点がおかれすぎており，トヨタ自販の経営史としては不十分であるといわざるをえない。

特別賞

『ブリヂストンタイヤ五十年史』

発行：ブリヂストンタイヤ株式会社

２1.5×１５*cm*，本巻５３２Ｐ，別巻資料７８Ｐ（年表ふくむ），昭和５７年３月刊

選評Ｉ

『ブリヂストンタイヤ五十年史』は，大冊の多い社史のなかでは，比較的コンパクトにまとめられている。本史が，特別賞の方の候補としてとりあげられた理由の一つは，そのあたりにあるのかも知れない。しかし，私見によれば，本社史には“読みやすく”するための配慮がいきとどいているという性格はとぼしく，むしろ，過去の重要な意思決定事項を中心に，企業の発展過程をたどるという“普通の”社史のスタイルをもっているように思われる。

本史では，ブリヂストン株式会社の発展過程は，ひとことでいえば量産・量販体制の形成過程として描かれている。このことは，タイヤという自動車工業関連分野で成長してきた企業の歴史のたどり方としては，ごく自然の方法というべきかも知れない。量産体制の側面については，一群の工場建設や技術力の蓄積過程が説明され，量販体制の側面については販売チャンネルの形成過程の記述などについてはゆきとどいたものがある。しかし，量産・量販体制の川上に位置する原料調達活動についての分析が，その重要性にもかかわらず，やや手薄なように思われる。かつては，天然ゴムの価格変動はタイヤ事業の運命を決定しかねないほどの重要問題であったはずであり，合成ゴムの登場は，そのような状況を大きく変えたとみることができる。そのような意味で，例えば日本合成ゴムとの関係などについて，もう一歩踏み込んだ説明があってもよかったのではないだろうか。

なお，ブリヂストン社のような企業の歴史をめぐっては，個人企業ないし同族企業の発展史として欠かせない重要問題がいくつかある。例えば，創業者のワンマン経営の実態と彼の引退の影響，株式公開に踏切った動機ないし

理由などの問題である。これらについても相当程度の説明が与えられているが，『資料』には，もう少し詳しい財務情報を入れて然るべきであろう。

選評Ⅱ

本社史は，足袋メーカーから地下足袋，ゴム靴量産メーカーを経てタイヤ国産化に乗り出し，世界有数のタイヤメーカーとしての今日を築いたブリヂストンタイヤの創業以来５０年の歴史を八つの時代区分のもとに綴ったものである。第１章，第２章では，創業までのいきさつと創業期における市場開拓と製造技術面での苦難の歴史が描かれ，先発の外資系メーカーとの厳しい競争の中で後発メーカーとして徹底した品質保証を貫いたこと，当時からすでに製品分野の拡大や合成ゴム事業への進出がはかられていたことなどが述べられている。３章，４章は戦時下の経営概況と戦後復興の過程におけるグッドイヤーとの提携やレーヨンタイヤ開発，事業多角化を軸とする技術革新との取組みが，第５章ではナイロンタイヤ開発，エバーソフト，エバーライトなどの化工品部門，国内タイヤ販売活動拡充など量産，量販体制の確立がそれぞれ述べられ，第６章では１９６０年代の株式公開と経営体質改善，とくに販売促進活動と多角的部門の活動強化，６８年デミング賞受賞に至るまでの総合的品質管理活動の実態が紹介されている。第７章では，ラジアルタイヤ開発と化工品部門強化，輸出強化と海外工場建設など自主技術確立と経営の国際化が，第８章では，石油危機以来の激変する経営環境に対する技術開発，販売，化工品部門拡充など総合化工品素材メーカーとして国際化の道を志向する同社の経営姿勢が描かれている。本社史は，５０年の間に家族企業から経営者企業へ，とくにタイヤ製造を中心とするゴム加工一筋に，しかもそれを軸とする総合化工品素材メーカーとして技術志向性の強い企業に成長したブリヂストンの歩みを，極めて平易に描いた社史である。そして自社の過去の失敗，例えばオートバイからの撤退やＱＣ運動の中での欠陥などについても客観的に取上げている。同社の経営の変遷が，極めて多角的かつ流動的なために時代区分の基準や，それぞれの時期で取上げる主題が整理しにく

いというハンディはあったにせよ，それなりの同社の経営体質や事業展開の特徴を正確に伝えてはいる。しかしながら，複雑な変化に富んだ企業の歴史であるだけに，またそれだけの個性をもった企業であるだけに，その全体像を貫く大きな糸が何であったか，とくに創業者石橋正二郎の企業者精神と，それを受継いだブリヂストンの経営理念と技術開発のフィロソフィーが，もっと強くうたい上げられてよかったのではないか。また，それぞれの時期の企業経営面の財務，組織，労務などの特徴を説明することも必要だったのではなかろうか。

選評Ⅲ

同社は，５０年史で扱う期間の大部分（昭和４８年まで）を創業者石橋正二郎の直接指揮の下に今日の発展を迎えた企業である関係上，５０年史も石橋正二郎の活動を中心にすえて興味深く読まれる社史となっている。

しかも創業者の伝記としては，別に『石橋正二郎』（昭和５３年刊）があるので，５０年史では「事業史としての建前から客観的な事実の記述に終始」したとされており，実際にもこの態度が貫かれているが，単なる事実の羅列ではなく，創業者の先見性や商品開発から生産，販売に至る経営各部門に対する創業者の見識を軸に，社業の発展の姿が客観的によく画かれている。社業を中心とした時代区分など，全体の構成も適切である。

編集に当っては，外部監修者を依頼したとはいえ「社史の手づくり」をめざし，資料の整備・執筆には，企業内部のものが分担して当っているが，記述相互のバランス，記述事項の歴史的な繋り等全体の統一性についても充分配慮されている。手作りの社史という意味でも代表作といえよう。

本書は，よく整備された資料を別冊とし，本文では時の問題に密着した資料にとどめ，できるだけ通読できるように工夫されている。しかし，本文を通読すると，別冊資料のほかに膨大な内部資料を使っての記述であることが伺われる。余り繁雑になれば逆効果であるが，記述に考証的配慮を加えれば，さらに迫力ある社史となったのではないか。

特別賞

『明治生命百年史』

発行：明治生命保険相互会社

２１×１９cm，４０５Ｐ，資料４６Ｐ（年表ふくむ），昭和５６年７月刊

選評Ⅰ

一般の読者を対象としたハンディな社史としての『明治生命百年史』は，この種の社史に要請されている基本的諸条件をまず満たしており，模範的な成果ということができよう。保険思想というものは，いうまでもなく明治期には外来思想であり，保険制度もまたinstitutional transferとして解されねばならない。本書の圧巻は，会社の創業期において，この思想を明治経済を背景にし，移入主体とかかわらしめて分り易く解説し，保険現象を読者に身近なものとすることに成功している点である。

これに対し，戦後部分の叙述に関しては，なお改善の余地があるように思われる。その二，三をあげれば，短・中期的展望が中心で，戦後の長期的問題点がかえってぼかされている。つまり，もっと問題をしぼり，それを長期的に掘り下げて，しかも平易に説くべきであった。さらに，三菱という恵まれた環境にありながら，業績が今一歩伸びきれなかったのはなぜか，が問われていない。加えて，これと関係して他社との相違に言及されていないため，明治生命の個性が浮かんでこない，ことなどである。

以上のような不満な点もないわけではないが，財務分析その他において秀れた点も多々あり，リコメンドに値する社史であることに間違いない。

選評Ⅱ

本書の「あとがき」に，編集の基本方針として「第一に史実の考証と叙述の客観性を重視した１００年の通史とし，経営史としての水準を高めることを常に心がけること，第二に当社の事項に終始することなく各時期における

わが国生命保険業全体の動向とその背景を極力盛り込むこと，第三にご覧いただく際の便宜を考慮し，体裁等はできるだけコンパクトなものにすること」を掲げている。

このねらいは，本書にかなり生かされていて，全体で４００頁余におさめられ，読みやすい社史となっている。それだけではなく，創設者と彼らの経営理念，各時期の経営責任者の経営方針，経営業績の他社との比較，募集政策と外務員充実，三菱財閥との関係，新商品の設定と販売，資金運用などが，資料にもとづいて簡要に述べられている。コンパクト判にしては内容が凝縮していて，軽さを感じさせない。

本書の前半（昭和２２年７月９日以前，株式会社時代）は杉山和雄成蹊大学教授，後半（相互会社時代）を志村嘉一千葉大学教授が執筆しているが，いずれも近代日本金融史の専門家であり，しかも文章もこなれていて，佶屈さを感じさせない。

問題点としては，戦後部分においては，編集方針の第２である生命保険事業全体の動向と，明治生命のそこでの位置づけが必ずしも明らかになっていない点がある。たとえば，新商品の販売や国際化が業界全体としてどういう動きにあるのか，その中で明治生命は先導的であったのかどうか，という点などである。

なお，本書とほぼ同時に『近代生命保険生成史料』を刊行しているが，重厚な史料集であるとともに，新しい知見を加えている。伝統ある大企業として，そのような史料集を刊行したことを評価したい。

選評Ⅲ

1. この本は最初の４分の１ぐらいがたいへん面白く，あとの４分の１は淡々とし過ぎて面白くない。最初の４分の１の面白さは，事実の面白さに裏打ちされているからだ。と言ってしまえばそれまでだが，必ずしもそれだけではない。生命保険の知識が明治初期の日本に導入され，保険業が生れ育っていく過程は試行錯誤に満たされている。この本のライターは，当時

の新聞や雑誌などにもよく目を通し，かつまたいろいろな人物群像を登場させながら，その過程を面白くえがく。読者はなるほどと合点し，感銘するところも多い。明治生命の創立者阿部泰蔵の「長生の幸福を得る者相共に些小の金をすて短命の不幸に遭う者を助くる」の言葉は，気概と経　を語ってあまりある。

2. 残り4分の3は単調である。大正，昭和初期の発展と動揺，第2次大戦後の混乱の中での再建，経済成長の中での躍進などの様相を，それなりに的確にえがいていてはいるものの，叙述が平担に過ぎて退屈である。ハンドブック型式の「読んでもらう本」であるなら，編集，叙述にあたって一工夫欲しかったところである。

3. 例えば，高度成長期に最前線で働いた人たちの「話」を収録して活き活きした空気を伝えるとか，あるいは70年代から今日にかけて，年金，財形，国債発行，国際化といった変化の大波が生命保険業に与えつつあるインパクト，その意味をもっとまとめて，わかりやすく啓蒙的に書くような配慮が欲しかった。ああ，いま生命保険業は変革期に立っている，こんな社会的使命をになっている，と頭に残るような何ものかが欲しかった。

II. 候 補 作 品 選 評

候補作品

『沖電気１００年のあゆみ』

発行：沖電気工業株式会社

１９×１３.５cm，４３８Ｐ，（資料１９Ｐ，年表２３Ｐ，参考文献１Ｐ，索引なし），昭和５６年１１月刊

選評Ⅰ

創業者沖牙太郎が東京京橋の町工場を明工舎と名づけて，電信機などの製造をはじめてから，エレクトロニクス総合メーカーに成長した昭和５６年までの１００年の歴史である。同社の事業分野が極めて技術革新の激しい通信，エレクトロニクスである関係上，記述の重点は当然技術開発や生産の変遷におかれている。その内容は極めて広汎かつ専門的なものであるにもかかわらず，執筆者に人を得て，「企業戦力としての社史」，「まず読ませるハンディなもの」という編集者の意図は充分達成されている。また技術的側面だけでなく，経営の節目節目における創業者を始め経営者の人柄や経営方針，資金的背景，関係会社等についても適当な説明がなされていて，すぐれた経営史の一つの見本といえよう。

希望をいえば，①複雑な内容を殆んどすべて文章で読ませようとしており，それはそれとして成功しているが，今少し写真，図表，グラフ等を併用すればなお一層読者の理解を助けたのではないか。②また文中数多く出て来る横文字やカナ文字の商品名，技術名，単位等について，重要なものについては文中に説明があるが，索引や注記等を併用すれば，エレクトロニクスの専門的知識を有しない読者にも，更に理解し易いものとなったであろう。

選評Ⅱ

最近の社史がとかく大型となり，盛り沢山になる傾向があるなかで，本書はハンディで読まれるものをという方針のもとで編纂したと記されているが，そのことは十分に実現されていると思う。導入部分（プロローグ）も社史と

してはユニークであり，読者の興味をそそっている。叙述は専門家（ジャーナリスト）による単独執筆によっており，全体的には読みやすいものになっている。社史もまた多くの読者をもつべきであるという点からすれば，執筆者が経営史家である必要はない。むしろ経営者が交替するときの背景などは生き生きと書かれており，会社に対する読者の親近感を高めている。

しかし文筆家による単独執筆ということには欠陥もまた多い。沖牙太郎の伝記を中心とした第1章と第2章の近代的企業への発展を除けば，記述は沖電気の製品開発を中心に進められ，財務・労務・生産の発達に関する記述が断片的である。経営者の交替についてはその都度書かれているが，沖電気をめぐるその他の人物像が不明確である。比較的小さな社史のなかにすべてを盛り込むことは不可能であるにしても，重要な点の記述が不十分であるとすれば，読ませる社史としても資格に欠けるのではあるまいか。

選評Ⅲ

例えば，『三菱社誌』のように，専ら記録を残すことを目的とした社史もある。しかしそのような例は極めて少なく，社史の大半は“興味深く読める”ように種々苦心しながら作られているのであろう。しかし，現状では，そうした努力は結局は中途半端なものに終っているといわざるを得ない，特別な関心の持主でなければ，電話帳のように大型で分厚く，生硬な文章の続く社史を読み通すとは思えないからである。

そのような中にあって，『沖電気１００年の歩み』は，読みやすい社史をつくるという方針が徹底したものであることに最大の特色がある。この会社の場合，創業者・沖牙太郎の立志の物語があるばかりでなく，最近非常に注目されている技術的な先端産業に属しているため，人々の興味をひきつける材料に事欠かないともいえよう。しかし，本書の場合には，本の型，ページ数のみでなく，構成や文章のスタイル，更には執筆者の人選についても，前記のような方針に従った選択がなされているのである。

このように，本書の最大の特色はリーダブルであることをねらって，相当

程度までそれに成功していることである。しかし，読みやすさと記述や分析の周到さとはしばしば両立しがたいことも事実であり，本書にもそのような傾向が認められる。例えば，沖電気は，電々公社を中心とする官需を主軸に成長してきたことは再三に亘って論及されているが，それが売上高の何割位を占め，時代的にどのように推移してきたのかは説明されていないし，そのような市場基盤から，どのような企業体質が生じたのかといった問題にも全く触れられていない。また，本文中には，統計資料やグラフ類は全くのせずに，専ら文章力によって読ませようというのは，やはり少し無理があるように思われる。

候補作品

『倉庫精練史』

発行：倉庫精練株式会社

２６×１８.５cm，６２７Ｐ（資料９０Ｐ，年表３５Ｐ，参考文献１Ｐ，索引なし），昭和５５年１２月刊

選評Ｉ

本社史は，北陸金沢地区の一種の伝統産業である羽二重精練業の合同集約と織物保管倉庫業との兼営事業としてスタートし，やがて人絹加工，捺染から戦後の合成繊維加工メーカーとして市場，経営環境，生産技術などの変化の激動の中を生き抜いてきた地方繊維メーカーの歴史をまとめたものである。倉庫精練株式会社そのものは大正３年の創立であるが，本社史は創業以前の石川県における繊維工業の成立と発展にかなりの頁数を割いており，殖産興業政策時代の金沢製糸場創立から，明治期における石川県の羽二重生産と輸出，羽二重取引における検査制度，羽二重精練業の実態が明らかにされている。そして第４章で２次にわたる精練業合同の経緯が述べられ，この精練業の合同と倉庫業の一体化が石川県当局の指導のもとに進められた経過が明らかにされ，第５章での倉庫精練創立と精練，倉庫一元化による経営実態と生産状況の記述に結びつけられている。第６章では昭和期に入っての産業統制や人絹加工への進出が取上げられ，第７章では戦時中の企業整備と戦後復興期の実態が，第８章では戦後の合成繊維の勃興の中でベンベルグ加工をめぐって旭化成系列下に入った経過とその後の展開がそれぞれ明らかにされる。そして第９章では高度成長期と合繊不況を通じての構造改善など転機に立つ繊維産業の中での同社経営，第10章で石油ショック後の安定成長期と長期化した繊維不況の中での合理化対策と体質転換へ模索する同社の実態が語られる。

以上の如く本社史は石川県の地方繊維産業史をそのまま体現した一企業の歩みを，変転極まりない繊維の生産と流通の歴史の中に位置づけ，県や国の産業奨励策や中小企業対策や構造改善政策とも関連づけたものと評価するこ

とができる。記述の仕方も客観的であり，古い社内資料をよく吟味し整理したこともうかがえる。ただ欲を言えばこれだけ激しい変化の中にもまれて来た繊維企業としての主体的な経営戦略の変遷であるとか，旭化成系列に入ってからのマーケティングの実態，繊維流通形態の変遷ならびにこれと倉庫保管業務の物流機能重視への転化との関連などがもっと体系的に説かれていればユニークな社史としての価値を高めえたであろうと思われる。

選評Ⅱ

繊維加工企業の社史は，今まで皆無であったわけではない。最近では，昭和３６年に上梓された「福井精練加工史」とか，同じく３９年版の「蘇東興業史」などは逸するわけにはゆかない。ここで論じられる「倉庫精練史」は石川県の小精練業者の合同によって生誕した倉庫精練（１９１４）の背景・合同過程・発展を記述したものであり，地方企業の一世紀に近い生い立ちが，資料にそくして記述されている。

本書の長所はこの貴重な記録資料が豊かに収録されていることにある。これは経営史研究者には利用価値の高いものである。この点地方の工業企業史としては評価してよいであろう。「あとがき」にも記されているように本書の執筆にはかなりの準備期間があったようであり，それがこれを可能にしたものと思われる。会社史の中では宣伝臭が余り強くないのも好感の持てる点である。しかし同時に社史として全体を評価した時，本書には望まれる点も数多いというのが読後の印象である。本書の骨組は専ら記録された資料にもとづいて記録されている。われわれ経営史家にとってもこれら資料は利用価値が高いものであるが，ヒアリングにもとづく記述が全くないため，意思決定のプロセスに触れるところが全くない。またこれと関連して，同社発展の中で個々の経営者の果した個性的役割がきわめて不明瞭である。更に基本的経営戦略というものも必ずしも明らかでない。記述にアクセントがなく，企業（執筆者）が何を主張したいのかという点が必ずしも伝わって来ないし，迫力に欠けている。

以上の諸点は恐らくこの社史が社内の努力によって執筆されたことと無縁ではないであろう。もし経営史研究者の若干のアドバイスがあったら，本史は大幅にその内容を改善し得たであろう。この点，真摯な努力が読み取れるために惜しまれてならない。

候補作品

『歴史に翔ける――三洋証券七十年史』

発行：松井経済研究所，藤井栄著

16×13.5cm，386P（資料8P，年表31P，参考文献は文中，索引なし）

昭和56年9月刊

選評 I

三洋証券は昭和48年に，日東証券・江口証券・大一呉証券三社合併により総合証券化した，業界十指に入る証券会社である。この合併の中心となった日東証券では，すでに50年史として『父子二代』，60年史として『激流に生きる』を刊行しており，本書はこれらに続くものとして作られている。

本書は，前2書と同様にB6判でハンディな装丁で，手軽に読めるものを狙っている。執筆もジャーナリストに依頼し，物語風にまとめている。会社側としては，①読みもの風，②日本資本主義発達史を踏まえて，③第三者による客観描写，を執筆者に注文したといわれているが，おおむねその意図は実現されているといえよう。

日東証券創業者である土屋家のルーツを探ったり，ジキ取引史を調べたり，証券市場史をひもといたり，執筆の背後に苦心をはらったところも見え，参考文献も文中に著者名・書名を挙げていて良心的である。

三社合併事情，野村証券との関係，江口証券史など興味ある事実が述べられており，三洋証券の市場シェアの推移，店舗政策，国際化政策，コンピュータ化など最近の状況についても書かれている。しかし，物語り風にしたためになまの資料や統計数字が全くないのはある意味で社史のイメージをつかみにくいものとしている。たとえば，取扱高やシェア，資本金，利益金など基本的なものはグラフ化して示すなど，読みやすさのための工夫が必要ではなかったか。数字を文中に入れるのは，読みやすさを損ねる点もある。また，最近の組織図，店舗網の図なども欲しかった。

選評Ⅱ

本書は，日東証券と江口証券とが合併して成立した三洋証券の社史である。したがって日東証券史，江口証券史，三洋証券史の三部から構成されている。内容は読者にたいする読みやすさを重視し，ドラマチックな証券取引，とくに直取引の発展を軸とした日東証券の発展を中心に叙述されている。

証券会社の歴史は必ずしも少くないが，当社のような中小証券の成長とその役割を実証的かつ読みやすく書いたものはごく少いので，それだけに興味深いものがある。文体も平易かつ証券史上の諸事件の裏表に触れており，異色ある，かつ有用な社史である。野村の系列化，合併の記述などとくに興味深い。

しかし本書は，直取引の発展という好個のテーマをもちながら，内容は取引所の法制史，制度史にひきずられ，肝心の直取引ビジネスの実態とそれによる中小証券の発展が，それほど明確なイメージをもって描かれていないうらみがある。その反面で，糸屋平八の活動が土屋商店の直取引のレールを敷いたというような，かなり強引な論証をしていることも気になるところである。執筆者のすぐれた筆力で，もっと直取引→短期清算取引の実状，それによる証券業の発展の実態にふれてほしかったと思う。さらに，注を省いたかわりに文中にカッコで引用文献を記しているが，それがかえってしばしば文章を読みにくくしている。

選評Ⅲ

(1) 証券業史の裏表に通じる著者は，明治以来の証券業の目ざましい変遷を絶えずバックスクリーンに映し出しながら，その上に人物と会社を登場させ，時には著者一流の解説を織り込み，読者を魅きつける。見事である。この手法はハンドブック型式の社史，とりわけ証券業という表と裏の両方を見ないと実態のわかりにくい業種の歴史には不可欠である。三洋証券はもってこいのライターを得たといえよう。その学識と関心，職人芸的な仕上げ方法など，すべてについて確かである。

(2) 明治の日本に株式というものが登場するが，表舞台の株式市場の裏で旧来のジキ取引がしばらく行われていた。この裏街道で土屋鋭太郎商店は生まれ育つわけだが，こういう裏街道を残しておいたところに，つまり，表と裏を使い分けて発展してきたところに，日本の近代化の面白さがある。そういうこともよくわかるし，また著者が証券業界を動かすのはしょせん人であり，人と人のつながりは「奇縁」だとして，いろんな人物の関わり合いから会社の動き伝えているのも面白い。三社合併をスクープ合戦から解き起こし，その動きをフォローしているのも一つのアイデアだ。

(3) 著者は「風変わりな社史」と言うが，こういうパターンの社史はもっとたくさん生まれてよい。

候補作品

『四国銀行百年史』

発行：株式会社四国銀行

２６×１８cm，６７１Ｐ（資料２２８Ｐ，年表４６Ｐ，参考文献・索引なし）

昭和５５年７月刊

選評Ⅰ

明治１１年１２月，第三十七国立銀行として発足した同行が，多くの国立銀行や貯蓄銀行を吸収しながら士族商法の銀行から，地域住民に密着した大衆銀行として四国地域中枢金融機関としての地位を築くまでの１００年の歴史である。本書の弱点は戦前の内部資料を戦災によって消失したため新聞，図書等外部資料に全て依存せざるを得なかった点にある。このため記述は少い資料を中心とする断片的説明に止る点も少くない。資料重視の良心的編集態度は，それはそれとして貴重であるが，このような場合には，生存者に対する面接取材等によって，記述を更に補強することも検討すべきではなかったか。

また記述は，土佐藩政史に始まり，経済の一般情勢や高知県の産業情勢等に相当のスペースをさいているが，これは必ずしも銀行の業務との密接な関連における記述とはなっていない。いわば外部環境の記述によって銀行の置かれた立場に類推を求めるといった結果となっているが，前述の資料の制約を考えれば，ある程度やむを得ないことかも知れない。

選評Ⅱ

本書は，①地域経済の発展過程と地域社会に果してきた銀行の役割を浮彫りにし，②明治，大正，昭和の時代の変遷に即応してい，どのような経営理念，経営方針をとってきたか，③合併された銀行の史実を記録すること，を主眼とした編集方針をとっている。

しかし，史料が灰燼に帰したこともあってか，本書は戦後３４年間の記述

に約半分を割いており，戦後史に重点をおいた年史である。また，史料が乏しいので，四国銀行は４つの国立銀行を継承しているが，本書は第三十七国立銀行－高知銀行－四国銀行の系譜を本流とし，国立銀行の部分も第三十七国立銀行を中心に記述している。このため必ずしも高知県金融史が充分に描かれていない。

しかし，土佐銀行が高知銀行の軍門に下るまでの両行のはげしい対立抗争，安田銀行と高知銀行の関係等は読ませる魅力は充分ある。さらに，石井定七事件と高知商業銀行の関連など，もう少し詳述すれば高知県金融史としての厚みがましたであろう。

とくに，編集方針の①は重視すべきであるが，具体的な取引先の資料が乏しいために，明らかにされておらず，わずかに門田理之輔の手記を引用して，日露戦争後の銀行の利益の大半は紙とあるのが注目されるにすぎない。

総じて，史料乏しきが故に大変な苦労の跡がしのばれるが，本流を追い，戦後史に重点をおかざるを得なかったことが惜しまれる。

選評Ⅲ

本書の「あとがき」には，編集方針として「(1)地域経済の発展過程と地域社会に果たしてきた当行の役割を浮き彫りにし，(2)明治，大正，昭和の各時代の変遷に対応して当行がどのような経営理念，経営方針を選択してきたかを探り，(3)当行に合併されてきた銀行の史実を記録すること」を主眼点としたと書かれている。

同行はすでに『四国銀行五十年史』（昭２５），『四国銀行戦後十年史』（昭３１）の２冊の年史を刊行しているが，稿を改めて取組んだとされている。これは，最近の金融史研究の発展と地方銀行史の充実といった状況から考慮された方針と思われるが，史料の制約もあって，必ずしも意図通りには実現していないようである。つまり，基本史料焼失により新聞・回顧談で埋めるという方法がとられたため，記述にアンバランスが残っていること。

編集方針にもかかわらず合併銀行の歴史が極めて簡略であること，など筆

の及ばなかった箇所が散見される。

さきに刊行された年史で触れられていない部分は第6部高度成長とともに第7部安定成長への道であるが，この部分には約100頁しか紙数が与えられていないために，意外と内容に稀薄感が残っている。とくに，編集方針で掲げられた「経営理念・経営方針」については，必ずしも具体的ではない。

編集方針の(1)に関することであるが，日本経済と高知県との関係，金融機関全体の中での地方銀行の地位，といった全体状況との関連で四国銀行をつかむ環になる所が十分に追究されていたように思われる。これなしには，経営方針の変化を理解する鍵が不足するといわなければならない。

候補作品

“NISSAN/DATSUN” A History of Nissan Motor Corporation in U. S. A., 1960－1980

発行：Mc. Grow－Hill Book Co., J. B. Rae 著

２３.５×１６cm, ３３１P（資料９P，参考文献１４P，索引７P）１９８２年刊

選評Ⅰ

本書は評価の大変難かしい書物である。それは，一つには日本の海外販売会社であるということと同時に，最近の２０年間の社史であるということに由来している。「難かしい」と記したのは，例えばアメリカの，学者が執筆した企業史として見れば，本書は群を抜いた出来であるとは言えない。そしてアメリカの風土では，個人の責任で企業史を書くのがめずらしくないことを考えれば，このこと自身を大きなメリットにすることは出来ないかも知れない。

本書は「It should be sufficient scholarly merit to be acceptable in college classrooms」(p. x)という目的で書かれたものである。つまり学問的業績には入らないにせよ，企業の宣伝を目的とした社史でもないというわけで，少なくとも sources, references, index を付してあるのは評価してよいであろう。

本書の最大の特徴は，優秀社史と言われる多くの社史と異なり，その対象が過去２０年間，つまり，非常に若い企業の歴史であるという点である。従って記述は細部にわたり，大変有益であり面白いが，同時に，全く触れられていない点がある（例えばディーラーとの契約，U. M. C－U. S. A. のバランス・シート，同社のストライキ〔P２７５〕の理由など)。実態の記述に詳しい（これは大きなメリットである）一方，分析が手薄だという印象もないではない（例えば成功を究極は人物に帰している〔P２８７〕など）。

候補作品

『五十年史――日本農薬株式会社』

発行：日本農薬株式会社

２６.５×１９cm，４６９Ｐ（資料１５Ｐ，年表１２Ｐ，参考文献・索引なし）

昭和５６年１１月刊

選評Ⅰ

昭和３年，業界の東西を代表するライバル同士の旭電化製薬部門と藤井製薬が合併して，農薬専門総合メーカー日本農薬が誕生し，（第１章）５３年１１月５０周年を迎えるまでの歴史である。前史として徳川期にさかのぼる病害虫防除（序章），明治大正期の防除と古河鉱業の大正７年設置の古河理化試験所の歴史がある。（第１章第１節）以下一般経済史の７つの時代区分による章別を縦糸に，一般経済情勢，農業，農政，防除，企業に関する諸問題を横糸として，その桝目には更に細かく項目を設定して，時の問題が，もれなく客観的に記述されている。

このような構成と記述態度をとっているためか（桝目相互間の関連が切断されていないか，記述事項の軽重の選択は適当であったか，企業の発展に即応した時代区分はなかったか），あるいは企業自体が強力なバックをもち，おおむね順調に成長してきた安定した企業であるせいか，本書から経営的側面のダイナミズムを読みとることは困難である。これに対し，防除技術，農薬の変遷，生産技術の発展は，本書の中心的テーマであり，業界トップとしての同社の地位から見て，農薬業界史にも貴重な資料を提供するものである。ただし専門外の読者にとっては，数多い横文字名の薬剤の消長については，いま少し説明と評価を加えなければ理解しにくい点もある。

選評Ⅱ

本書は，日本農薬（昭和３年設立）の歴史をその設立の背景から説きおこし，５０年の社業の発展を日本の経済や農業との関連のもとで記述している。

内容は生産・営業・財務・研究開発・組織・労務の諸側面に及んでおり，全面的にバランスがとれている。ことに技術開発については同業他社の製品の紹介をまじえて主要な農薬の開発がわかりやすく書かれているので，わが国の農薬工業の発展状況を知るうえでも有益である。日本農薬が製剤メーカーから原体合成メーカーに転換した経緯も詳しく記述されており，興味深い。

しかし経営陣の紹介とその活動の内容について立ち入った記述が乏しいのは経営史としてみて物足らなさをおぼえる。たとえば「創立以来最大の不祥事」といわれる室町化成事件の重大さが読者には十分伝わってこない。こうした「不祥事」を社史にとどめたこと自体が大きな雅量であるかもしれないが，中途半端な記述では読者が当惑するのではあるまいか。またＡＣＣとの技術・資本提携問題についても内部の資料に基づいた記述がほしかった。

本書は社史としてのまとまりがよく，生産技術の変化の記述などにユニークな配慮がなされているが，全体的に内部資料の活用に足らぬ点があるように思う。

選評Ⅲ

日本農薬株式会社は，「発足以来 …わが国の農薬工業史ともいえる半世紀を歩んで」来たと自負する会社である。従って，同社の社史は，同社の経営史と共にわが国の農薬工業の発達史を知るうえで貴重であり，本史はそのような期待にそむかない内容を備えている。

本史は，きわめてオーソドックスな構成をもって書かれており，各時代の日本経済の状況，農学経済・農業政策のあり方，農薬工業界の動きについて，ゆきとどいた解説を加えたうえで，日本農薬の直面した経営上の重要問題とそれに対する対策がたんねんにあとづけられている。本史の中心をなす戦後史 — 戦前・戦中の記述は既刊の『三十年史』の要約という性格がある — についていえば，次のような企業成長の過程がたどれるというのが，本史のライト・モチーフとなっている。すなわち，戦後，有機合成系農薬の時代となり，大手化学メーカーが導入技術によって原体製造に続々進出するなかで，

日本農薬は当初は製剤メーカーでしかありえなかったが，農薬専門メーカーとして独自の販売網などをよりどころとして競争力を維持し，次第に研究開発活動を強化し，農薬取締強化に伴う新農薬開発努力が実り，新製品の自社開発に成功すると共にその原体生産にも着手し，農薬の一貫メーカーへと成長したという企業成長の歴史である。このように，全体を通じて，極めて明快な主張が読みとれることが，本史の優れた特色である。

この他，財務，労務，製造などの各職能分野の動きについても，かなり詳細な説明があり，内容の豊富な社史となっている。ただし，例えば，全購連との取引開始のように商系ルートによってきた同社の歴史からみれば，大転換であったと思われる問題についての分析がやや表面的なものに終っているのが惜しまれる。

候補作品

『福井銀行八十年史』

発行：株式会社福井銀行

２６.５×１９cm，９７２Ｐ（資料２８６Ｐ，年表５４Ｐ，参考文献２Ｐ，索引なし）昭和５６年３月刊

選評Ⅰ

きわめて水準の高い，かつ特色のある地方銀行史である。重点は，福井県の産業発展と当行とのかかわりを８０年にわたって論述することにあり，特に，常に中心産業であった織物業に関しては，福井県が明治１０年頃に始まる「かさ地」の製織から羽二重の黄金時代を経て，その衰退を人絹により乗りきり，さらに第２次大戦後には，合繊製織の中心地に変貌する過程とかかわらせながら，福井銀行が他の地方銀行を合併しつつ地場産業とともに発展する姿を描くことに力点を置いている。コラムを随所に挿入したことも成功している。

あえて難を言えば，経営者に関する記述が平板なこと，吸収銀行についての前史がないこと，この二点は改良の余地があったであろう（特に，北越銀行史との比較において，収録資料も膨大である後者に及ばない）。

選評Ⅱ

本書は読みやすい社史であり，内容的に次のような長所がある。

第１に，福井県における銀行合同の過程がよく叙述されている。とりわけ福井銀行が，どのような合同方針をとってきたかが判明する。戦前の地方銀行の歴史は銀行合同の歴史であって，地方銀行経営者の合同観を解明することは大切な作業である。この点，本書は大変参考になる。

第２に，一貫して支店政策の展開を追っていることだ。したがって，福井銀行が県下の中心銀行として地域的に拡大して行く過程が十分よみとれる。

第３に，合同政策，支店政策をふくめ，好況，不況それぞれの局面におい

て，銀行経営者は直面した経営課題に，どのように対処したか，この点を解明しようとする姿勢がみられる。

第4に，地方産業との関連を追求している。また福井大震災，若狭の風水害，芦原温泉の大火に対する銀行の活動についても要領よく記している。

第5に，県内銀行の動向についても配慮している。

第6に，随所にコラム欄を設け，読者の興味をひきつけるように工夫をこらしている。

本書は，以上のような秀れた内容をもつが，平易に読みやすい叙述を重視したためか，全体として考察が表面的な感を免れない。各章（それぞれの時代）ごとに日本経済――地方産業・地方金融――銀行経営という3部構成をとっていることが，かえって銀行経営および業務それ自体の特徴づけを稀薄にしているように思われる。

被合併銀行についての叙述も簡単である。

候補作品

『丸善百年史』

発行：丸善株式会社

２１.５×１５.５*cm*，上巻７５０Ｐ，下巻９６１Ｐ（索引２８Ｐ），資料編４６２Ｐ（資料４１２Ｐ，年表５０Ｐ）

選評Ｉ

本書は，社史としては誠にユニークな社史である。着手以来完成までに１６年の歳月をかけ，執筆者四氏は編者でもある木村毅氏以下いずれも高名な一流の文化人で，この四人がそれぞれの分担部分について個性的な筆を揮っている。日本文化の近代化に貢献することを社業の目的とする丸善ならではの事業だというべきであろう。

全体は四つに分かれ，第１編は創業から日清戦争前後まで（明治前期）を対象とし，ここでは，創業者早矢仕有的をはじめ丸善の創業に貢献した人物像と，丸善が取扱った書物や洋品類についての人物論や書誌学的考察を中心として，丸善の形成史が述べられる。人物と書誌を通してみた日本文化史と，その中での丸善の位置・役割が浮きぼりにされているといえる。これに対して，日清戦争から明治末まで（明治後期）を扱った第２編では，明治３０年から発行され始めた月刊雑誌『学燈（鐙）』の記事を中心に，当時の読書界（それも文学に傾斜した）と文学界の潮流を論じ，その流れの中に書店丸善を位置づけようとしている。そして，ここでは明治３４年に丸善に入社して，この雑誌の編集を担当した内田魯庵の役割が強調される。筆者によれば，丸善の骨格は早矢仕有的がつくり；福沢諭吉がこれに魂を吹きこんだが，それに肉づけをしたのは内田魯庵であり，「魯庵をのぞいて，二十世紀になってからの丸善の歴史はあり得ない」のである。『学燈』の歴史と魯庵を論ずることが，ここの中心テーマである。大正期と敗戦までの昭和期を扱った第３編は，世相を反映する読書界の動向と丸善の経営の諸側面を，いわば混然一体として描こうとしている。この編で初めて，読者は経営体としての丸善の

実態に全体として触れることができる。店員の手記等を利用した店内の様子や店員の生活の描写，旧社史では触れられなかった戦前における従業員ストライキについての「赤旗」記事を利用しての記述など出色である。戦後を扱った第４編は，社史の記述として誠にオーソドックスで，それぞれの時期について，店舗，重役陣，組織，社員（給与・構成），洋・和書の商況，出版活動，事務機・文具・洋品の商況，業績を中心に経営活動全体にわたって目配りのきいた記述をしている。

このように，この社史は企業の特徴を浮きぼりにし，読者をひきつけるという点ではまさに第一級であり，一社の社史を書く場合の書き方について代表的サンプルを示したという点で社史のあり方を模索している関係者に示唆するところも大きい。

ただし，一個の社史は一体として評価さるべきであり，社史が経営の歴史である以上，経営の重要な側面の歴史的展開過程が正確に記録されるべきだという立場に立てば，この社史がそれなりの問題をはらんでいることを否定することはできない。

選評Ⅱ

企業外の四人の専門的歴史家に社史の執筆を一任し，目次に執筆者名を明記して完成したこの社史は，企業内のスタッフを中心に作成された他の多くの社史と異なり，記述内容の客観性の保証と丸善事業史の広い社会的視点からの意味付けに成功しており，本格的な社史の重要要件のひとつをみたすものとして高く評価さるべきであろう。また本書を通読することによって，明治１００年の日本の学術文化の発展を通観することも可能である。自ら洋書輸入という文化的事業ならでは刊行できない社史であり，早矢仕有的以下歴代経営者像の描写その他平明流麗な叙述に満ちた楽しい社史である。

ただ，もし「社史」を厳密に企業経営の歴史として考えると，この『丸善百年史』は「社史」の枠組を大きく逸脱しており，他方，企業の経済的・経営的側面についての記述は著しく不足しているので，本書はむしろ「丸善文

化史」として受取るべきかもしれない。経営史としての「社史」とみるには，企業の財務面，営業面についての記述が乏しいのである。たしかに，丸家銀行など関連事業についての記述はあるが，書籍輸入業務そのものの貿易金融が，どのような制度・手段によって賄われていたのか，また具体的には明治４２年の火災後の再建資金が，どうして調達されたのか，戦前丸善が保有した外貨債は，どのように管理されたのかなど当然詳述さるべきであった。さらに，仕入書の選定，その海外への発注，海外の取引業者，書籍の輸送などがどのよらに行なわれたか，またそれら業務の経営費用，それとの関連で決定される輸入書の価格がどのような変遷をたどったのか，それら営業面についての体系的な叙述を欠く本書と厳密な意味での「社史」として評価することは不可能のように思われる。

選評Ⅲ

上・下１７００ページにおよぶボリュームと，２０年近い年月にわたる労苦の成果たる本書は，期待にたがわぬ出版文化１００年史となっている。こうした業績にたいし，誰しも賛辞を送るのにやぶさかでないであろう。とくに明治の文明開化いらい，丸善の輸入する書籍の内容の変遷。学燈掲載の諸論説を通じて，日本の社会の動向や諸問題を深く立入って観察している本書は，読者につきぬ興味を喚起させてくれる。

本書については，諸新聞でその特徴と価値を論評しており，ここで類似の評価を付すより，いくつかの問題点をあえて指摘してみたい。第１に本書は，あまりに筆者たちの個人的な文学的趣味がすぎ，いたずらに「遊び」によって膨大な文献となっている嫌いがある。この点は枚挙にいとまがないほどだが，たとえば日露戦争にたいするトルストイの態度や与謝野晶子の話など，さらに幸徳秋水事件，乃木大将自刃についての記述にしても脱線がすぎはしまいか。

第２は，経営史的な観点からすると，ページ数に比して記述の不備が目につく。最初の株式会社という論拠，営業成績，販売問題，店員の養成や活動，

どの面も物足りない。

第３には，表現が執筆者によってまったく不統一な上，あまりに大時代すぎはしまいか。５５３，５７５，７０４，７５１の各ページの表現は，たんに表現にとどまらず，筆者の史観がいかなるものかについてさえ疑問ないし矛盾を感じさせる。

候補作品

『三菱化成社史』

発行：三菱化成工業株式会社

２８.５×２１.５cm，６８１Ｐ（資料６１Ｐ，年表５０Ｐ，参考文献・索引なし）昭和５６年６月刊

選評Ⅰ

三菱化成は，いうまでもなくわが国を代表する化学会社であり，三菱グループの中心的企業である。化学工業の歴史について若干でも興味のある者なら，同社の社史を読むに当っては，戦前の三菱は何故に化学工業への進出に慎重だったのであろうか，東洋窒素組合はなぜアンモニア合成事業に乗り出さないままに終ったのか。野口と三菱との関係はどのようなものであったのかなどの諸点について，新たな史実の紹介や分析などが示されているのではないかといった期待を持つと思う。しかし，これらはいずれも，三菱化成にとっては創業前史であるためか，説明も非常にあっさりとしたものにとどめられていて，そのような期待に十分答えうるとは思われない。

本史の最も興味深い部分は，なんといっても会社設立の経緯について記述されている２０ページ弱の部分である。ここでは，岩崎小弥太，西川虎吉，山田三次郎，池田亀三郎といった人々の努力や，富岡惟中の石炭化学構想を土台として，臨時タール工業調査委員会をへて，やがて日本タールの設立に至るプロセスが，手際よくフォローされているからである。この部分に関しては，文章表現も豊かであって「関係者は“東洋のＩＧ”たらんとする気に満ちていた」といった表現も発見される。

しかし，時代を下ると，このような良かれ悪しかれ感情を込めた記述は殆んどみられなくなる。これは“全員経営”をめざす，組織としての三菱化成こそが主役であって，個々人についての記述は避けるという編集方針によるものであるという。ときとして，このような特殊な配慮を必要とすることがあることは否めない。しかし，例えば，年率２０％の売上高の拡大を目標と

するといった，活気に満ちた高度成長期の企業の姿などが，余りに担々とした記述にさえぎられて，うまく伝わってこないように思われてならないのである。

選評Ⅱ

本社史の第１の特徴は，短期間にメーカーの社史を作る場合にありがちな，分担執筆原稿を集め，部門史の集合として体裁をつくろうというのではなく，約５０年の企業の歴史をトップの経営戦略に即して総合的に記述していることである。読者は，本書をひもとくことによって，化学メーカーとしてはるかに後発であった三菱化成が，わずか５０年足らずの間に，いかにして日本一の総合化学メーカーに発展し得たか，その発展がどのような多角化戦略に支えられていたのかを，つぶさに知ることができる。巻末の「編集を終えて」と題したあとがきによれば，本社史の執筆期間は僅か１年弱でしかなく，これだけの短期間に，これだけの明確な執筆方針に貫かれた総合的社史が製作されたということは，試に驚異である。まさに「組織の三菱」にふさわしい組織の力が結集された賜であろう。しかし，そればかりではなく，あとがきにも記されているような草稿の存在と，有能な化学工業エコノミストともいうべき化学経済研究所の数人の書き手に執筆を委ねたこともまた，この成功に大きく寄与しているように思われる。

第２に，以上の点と関連するが，最後に「未来編　当社の将来――２１世紀を目指して」というタイトルのもとに，これまでの歴史を踏まえて，現在三菱化成が抱いている将来構想について多くの頁を割いていることにも注目したい。多くの社史が，現在に近づけば近づくほど経営戦略について触れるのを避けるか，避けないとしても及び腰になる状況の中で，これもまた特筆すべき本書の特徴である。このほか，しばしば無視もしくは軽視される労使関係や企業財務にまで目配りが行き届いていることも，メリットとして指摘できる点である。

とはいえ，本書に注文がないわけではない。労使関係が記述されているこ

とは確かにメリットであるが，その記述が余りにきれいごとに終ってはいないか，なんらのフリクションなしに，現在のような労使関係が形成され得たのであろうか，また，仮に初めからそれが存在していたとしたら，それを支えた労働条件（賃金，労働時間，福利厚生施設等）は一体どうなっていたのだろうか。第2に，全体として経営戦略に執筆の重点が置かれていることは当然であるとしても，それぞれの戦略にもとづく企業の行動の結果，どのような成果（とりあえずは期末財務諸表として表現される業績）がもたらされたのかという点についても，もう少し突っ込んだ記述があったらと惜しまれる。経営戦略と経営成果との相互規定関係が，企業行動を貫く一つの重要な柱だと考えるからである。

最後に，社史の前提となった草稿との関係も，また本社史を評価する場合のポイントの一つとなるべきものであろう。

選評Ⅲ

(1) 事業の足跡をよくフォローし，きちんと整理して十分に書き込んでいる。叙述は静態的で，事業発達につきもののダイナミックなイメージがあまり浮かんでこないが，技術進歩と会社経営の関わり合いに一貫してライトをあてているので救われている。

(2) 三菱化成の発足は昭和9年で，かなり遅い。日本の化学工業の先駆者には，野口遵のような「創造と破壊」の精神の権化みたいな人たちがいて，三井や三菱など財閥は化学工業進出に慎重だった。しかし，岩崎小弥太は着々と布石を打って機をうかがい，大きな夢を抱いていた。そこらへんは，よく読みとれる。

(3) 面白いネタがあちこちにちりばめられている。例えば，米軍が硫黄島に上陸し，イオン交換樹脂が開発されていることを知って驚ろいた話がある。こうした話は嬉しいが，この話に限らず，総じて誰がどうやって発明したか，あるいは失敗したか，という苦労話がない。

(4) 三菱化成は戦後，集中排除法に適用されるが，最終的には適用を免れる。

それでも三分割する。そのいきさつはどうだったのか。あるいは四日市燃料廠払い下げ問題が，曲折を経て三菱油化の誕生を見る。しかし三菱油化は次第に親離れし，三菱化成は水島進出へと動く。そこらへんの事情はどうだったのか。これらの疑問にあまり答えていないのは，社史としては仕方ないのかもしれない。社史以外の本でなければ裏話は思い切って書けない。しかし，それにしても当時の関係者の談話など欲しいし，また水島計画についての社内の空気や地元の対応など，もっと知りたいところである。

(5) 端正で立派な社史である。前記のような限界はあるが，社史としての限界をよく心得ている，という言い方も出来る。

候補作品

『三菱電機社史――創立６０年』

発行：三菱電機株式会社

２６.５×１９*cm*，８０７Ｐ（資料８０Ｐ，年表４５Ｐ，参考文献・索引なし）

昭和５７年３月刊

選評Ｉ

三菱電機は，すでに昭和２６年に３０年史にあたる『建業回顧』を刊行しており，本書は２回目の年史である。このことが反映していて，本書は沿革編，部門編，製品技術編，資料の４編よりなっているが，沿革編は『建業回顧』に書かれた部分は簡略化されており，部門編・製品技術も最近３０年間に記述の重点が置かれている。

企業規模が大きく，製品多角化のすすんだ企業で，読み甲斐のある本格的な社史を作成しようとするならば，既刊社史で述べられた点を簡略化し，述べられていない点を重点的に記述することは無理からぬ点であろう。また，このような構成をとることによって，最近の歴史を充実することができるというメリットを持つといえる。部門編・製品技術編も読んでいて重複感がない。

技術革新や市場の変化に対応した製品政策，国際化に対応した提携や進出，ＱＣなど合理化運動，製品多角化と製品構成変化にともなう組織の再編成など，最近のわが国大企業に共通のトピックスについて，同社の動きがかなり丹念に記されていることもメリットであろう。

ただし，部門編はやや叙述が簡に過ぎており，言葉で説明するだけでなく，図表のほしいところ（たとえば，営業体制におけるマトリックス状の図など）があった。また貸借対照表・損益計算書などの基本計数が乏しい（これは最近１期のみしか実数が掲げられていない）のは残念である。なお，部門編と製品技術編の間に口絵的に「目で見る６０年」４８頁が入っていて，見せる工夫がされていること，エピソード的ではあるが「戦争と社員」に７頁をさいていることなどでも印象に残った。

本社史は，「経営の流れを通史としてまとめた沿革編，事業を支える諸活動を述べた部門編，および製品と技術の変遷を収録した製品技術編の３編を主体」とし，これに「口絵，資料および年表を加え」て構成されている。主体を成す３編の中の部門編，製品技術編は，それぞれのテーマについて歴史的に目配りの利いた記述をしており，巻末の資料も社史として不可欠な資料を要領よくまとめて，ともに資料的価値の高いものだと評価できる。

本書の中心を成す沿革編は，以上を前提として「史実を中心に社会経済を背景とした経営史的な色合いを強め」たものという方針のもとに，当社６０年の歴史を約２５０頁余の紙幅の中で記述している。ぼう頭で６０周年を迎えた三菱電機，人，技術，経営という見出しのもとに，当社６０年の歴史の総括を与え，メーカーの経営の三要素ともいうべき人と技術と経営の理念や，組織にみられる当社の特徴を指摘していること，戦前と戦後のつなぎに終戦の日という見出しを設けて，４カ所の製作所にいた従業員のその日の思い出を掲げたり，戦争と社員という囲み記事で，これに関連するエピソードを記していることなど，沿革編を読み易くするための工夫が施されている。そして，沿革編の本文は１９２１年に三菱造船から分離独立した当社が，どのような経営理念を掲げ，そのときどきの問題を，どのような方針によって乗り越えつつ，世界企業を志向する総合電機メーカーへ発展してきたかを，企業活動の全体を視野に収めながら記述している。そこには，前提となる部門編，製品技術編の内容をそしゃくしながら，それを企業の経営理念，戦略，組織等と，できるだけ関連づけて，いわば経営史的に記述しようとする苦心の跡が読みとれる。

しかし，余りに総合的記述を意図したためか，特に第４章以下の各部門の事業展開を述べる部分や，技術・関係会社・海外市場・事業など企業活動の個々の局面について述べる部分には，部門編や製品技術編の記述との重複が散見される。そればかりか，このことが記述をやや総花的にして，それぞれの時期の企業活動の特徴を，かえって読者に伝えにくくしているのではない

かとも思われる。本書のような構成をとる場合には，個別部門の活動や製品・技術の歴史に関する部分は，思い切ってそれぞれの部分に委ね，沿革編の記述は，それぞれの時期に企業がおかれた外的環境に，それがどのように対応し，その結果どのような成果がもたらされたか，つまり，外的環境，企業の主体的対応（経営理念・戦略・組織・人的要素等），経営成果といったようなテーマにしぼるというような方法が考えられても良いのではなかろうか。もちろん，このしぼり方はあくまでも評者の一つの好みでしかないが，沿革編の記述をしぼるということは，このような構成をとる社史の場合，考慮してもよい点のように思われる。

候補作品

『安田生命百年史』

発行：安田生命保険相互会社

２６×１９cm，１１２８Ｐ（資料２４３Ｐ，年表３２Ｐ，参考文献・索引なし）昭和５５年１２月刊

選評Ｉ

本書は，明治１３年１月，初代安田善次郎が共済五百名社を創立して以降，現在の安田生命保険相互会社にいたる１００年の歴史で，１１００頁を超える本格的な社史である。

本書の特徴としては，①創業者安田善次郎の経営理念との関連で，創業・改組・発展の事情が述べられ，②経営政策についてとくに付編で部門別に記述し，③戦後については６次にわたる経営計画に沿って新商品の発売・販売，組織の強化，管理組織の近代化（コンピュータ化を含む），契約者との関係の密接化などが詳細に述べられている，などあげることができよう。各種資料や計数もかなり示されており，資料編・統計編も合計２００頁もあって充実している。

安田生命は以前，６０年史と８０年史を刊行しているため，本書では戦後に叙述の重点を置き，文章部分の８割をそれにあてているが，このように思い切った構成をとったことも戦後史の叙述を重厚なものとしており，すでに既発行の社史がある場合に考えられる社史の構成として，必ずしも悪くはない。

文中には「余話」が６２点も挿入されていて，読者の興味をひく工夫もなされている。

また冒頭には，安藤良雄（東大名誉教授・成城大学教授）の筆になる「共済五百名社の歴史的意義」が特別論文として掲げられており，わが国保険業草創期にはたした役割を明らかにしているのも注目したい。

なお，本書の発行に先立ち『生命の樹――安田生命の１００年――』（B

6判，３０８Ｐ）が刊行されていることを付記したい。この普及版が先行したことが，本書の構成に重厚さをもたらした点もすくなくなかったと思われるからである。

選評Ⅱ

全３部構成（戦前，戦後昭和４０年まで，以後最近まで）に，特別論文および資料を加えた１０００ページをこえる大著である。ことに戦後史に600ページ以上をあて，とかくひととおりになりがちであった戦後の企業成長を，綿密にたどった点で注目すべき社史である。

安田生命の場合，戦後は第１次５カ年計画以下第６次まで，数カ年の計画が樹立・実施されたので，各章はほぼこの計画期間に即して時代区分され，計画と方針，経済環境の推移，トップをはじめとする人事，新商品と募集活動，経営管理，資産の運用などが論述されており，とくに新商品と募集業務については，かなり立入って詳細に記述され，記録的価値，資料的価値も高いものとなっている。また他方，経営最高方針については，会長以下の談話を収録し，さらに６２項にのぼる余話（コラム）を入れて，読者の興味と実状を伝える工夫もされている。

さらに本書で見逃せないのは，冒頭に，共済五百名社を分析した研究論文が掲載されていることで，執筆者の労苦とこの面での学界への貢献に敬意を払いたい。

本書は，このように大きな特徴をもつ立派な社史であるが，１００年の歴史のうち６０年以上を占める戦前の株式会社時代の実証的記述が乏しいのが，なんとしても惜しい。また記述に，やや平板な印象を受けることと，構成にもう一工夫がほしかったと思う。しかし，いずれにせよ戦後の３５年間を詳述した社史としての記録性は，何よりも評価される。

候補作品

『社史――合併より十五年』

発行：山下新日本汽船株式会社

２８.５×２１.５cm，６８６Ｐ（資料５４Ｐ，年表５８Ｐ，参考文献・索引なし）昭和５５年６月刊

選評Ⅰ

本社史は，海運会社としては初めてともいってよい本格的社史である。全体は，合併会社である山下新日本汽船の１５年の歴史を述べた本史と，その母体となった山下汽船と新日本汽船両社の沿革を記した前史との二つの部分から成っているが，この前史のうち山下汽船の歴史は，社史が刊行されなかったこともあって，多くの研究者にとって一種のブラック・ボックスとなっていた部分であり，この１５年史の編纂を機会に，当社の沿革にまで関係者の努力が及んで，この空白が埋められたことは貴重である。日本の海運業史や財閥史研究への貢献は大きいと評価できる。また本史の記述も，企業活動の全局面を殆んどもれなくカバーしており，当社経営の基本理念である「物資の安定輸送に貢献し，業容の強化と国際的信用力の保持」を図るため，外的環境の変化に対応して，いかなる施策を選択してきたかを浮彫りにするという狙いも，一応達成されているといえる。

ただし記述の限りでは，この施策に当社の特徴がどのように現われているのかが必ずしも明らかではない。六中核体共通の対応と，当社の特徴的対応との区別が,もう少し明確に描かれていれば，と惜しまれる。また，本史が部門分担執筆原稿をベースとして，通史，営業，経営管理という三部構成をとったためか，集約化当時，事業拡大期，オイルショック後という，それぞれの時期における企業活動全体のイメージがとらえにくくなっているとの印象も拭えなかった。１５年を大きく３期に時期区分した上で，営業，経営管理をも総合した通史を描いたほうが，当社の歴史が読者に素直に伝わるのではなかろうか。

選評Ⅱ

海運企業の社史で「海運集約」後に重点を置いて執筆された最初のものであり，現代海運経営史の業績として貴重である。また編別構成でも，航路・船舶・船員といった伝統的区分によらず，営業，経営管理などに章区分して海運経営をより有機的に叙述しようとしている点も，経営史として評価さるべきであろう。ただ本編について言えば，通史にあたる総論の部分が簡単にすぎ，大部分を営業活動と経営管理にわかち，さらに両者を定期船，不定期船，タンカー，あるいは財務，組織・制度，船員，船舶などに細別して記述しているので，全体として叙述が重層的に分散し，その結果，記述に連絡性を欠き逆に重複が見られる箇所も少なくなく，企業の発展の基本路線を追い難い結果になっているのは惜しまれる。資料不足のゆえに，各部で分担執筆せざるを得なかったこともその一因であろうが，そのゆえか，たとえば定期船と不定期船との間にみられるように執筆のスタイルに統一性を欠くのも残念である。

しかし本社史には，経営史的観点をより多く採用しようとする姿勢が十分うかがわれ，とくに「計画用船」についての分析的叙述など貴重である。全編このレベルまで踏み込んだ記述がなされていれば申分ない社史になったであろう。その点，やや編集を急いだかと思われる本編に比し「集約」前を扱った沿革編は，資料的裏づけや時代を追っての歴史的発展の克明な記述において，はるかにすぐれており特に山下汽船に関する部分には従来の海運史書では明かにされていなかった事実が随所に記述されており，戦前日本海運史の記録として貴重である。

選評Ⅲ

(1) 合併後１５年の歩みを中心に書き，合併前の歴史をあっさり，要領よくまとめて添えものにしているのはよい。いま，社史をつくり，読んでもらう意図がはっきりあらわれている。

(2) この１５年間海運界にはいろいろの大波が襲った。コンテナ化等にみる

輸送革新の波，石油危機とそれに続く船舶過剰。あるいは船員費高騰，国際化の中で仕組船が著しくふえるなど，経営形態も大きく変った。さらに，海運政策の新たな展開が企業経営の盛衰に大きく関わった。そうした波に日本海運業界はどう対処し，当社はどう取り組んだか，を門外漢にもわかるようにやさしく書いている。これまた社史編纂の意図が，よく貫かれているように思われる。ところどころ欄外に「ことば」の解説を入れたり，新船の明細，あるいはグラフ等を掲げているのもよい。

(3) この社史には，二つの面からの不満が残るかもしれない。一つは，海運の専門家には少々あきたりない。たとえば，石油危機という波の業界と当社にもたらしたインパクト，その激動の様相について書き込み不足だ，あるいは仕組船についての意思決定や波紋等について不十分だ，といったことである。もう一つは，野次馬的関心からの不満で，たとえば合併のいきさつなど，あまりにあっけらかんに過ぎる　といったことである。しかし，これは海運トップ企業の社史ではないし，最初から何を書けば十分かを定めて編集，執筆したものとすれば，ないものねだりと言うべきだろう。

(4) ここ十数年，激浪にもまれた海運企業の足跡を自ら社史としてまとめたものが少いだけに，貴重な仕事として評価したい。

候補作品

『創業百年史——山梨中央銀行』

発行：株式会社山梨中央銀行

２６.５×１８*cm*，１００９Ｐ（資料２２２Ｐ，年表４５Ｐ，参考文献２Ｐ，索引なし）昭和５６年３月刊

選評Ⅰ

本書は，まことにバランスのとれた地方銀行史として，すぐれたものといえる。歴史的な源流を第十国立銀行の前身の興益社までたどり，明治維新以降の山梨県の産業発展と，合併を経つつ一県一行の山梨中央銀行として統合する過程が，過不足なく，しかも経営者はじめ経営主体の活動を十分視野にとり入れて叙述されている。この点で，学問的関心にこたえるとともに，読者の興味をも十分にひきつけることができる。ここに本書の大きな長所と魅力がある。

興益社と殖産興業下の山梨県の金融と経済，第十国立銀行の堅実経営の実状と資金運用の変遷，若尾銀行の合併の経緯，昭和初年の恐慌下における県下中小銀行の救済，山梨中央銀行の誕生の過程などとくに興味深く，また必要に応じて生糸，養蚕，織物，米，繭など県下の農工業の発展についての統計が掲載されていることなども，本書をバランスのとれた行史にしている。第３編合併銀行史のほか，第４編に消滅銀行史の編を設けていることは，たんに異色であるばかりでなく，結果的には山梨県銀行史としての性格を本書に与える上で有意義であり，成功した試みである。

あえて弱点を指摘すれば，戦後の３５年の記述が簡略すぎること，貸付業務はじめ内容に分析不足が感ぜられること。編別構成や章・節が平凡にすぎることなどが気になる。しかし，一般的に水準の高い地方銀行史のなかにあっても，本書は出色のものであることは疑いない。

本書の編集方針は，①前身銀行時代において典型的な地方銀行として生成，発展してきた銀行の史的展開の足跡を探求して，経営の特質を明らかにする，②山梨県経済の発展過程のなかで，銀行が地域社会の発展に尽してきた役割を浮彫りにする，③全国有数の銀行設立県となった山梨県の社会的，経済的背景を探究して金融面から考証を加え，かつ県内に存在したすべての銀行についても，その歴史を明らかにする，こととしている。

昭和１６年１２月「一県一行主義」によって，第十銀行と有信銀行の合併によって山梨中央銀行が設立された。前身銀行時代より説きおこし，自行の歴史に視点を据え，さらに山梨県下消滅銀行の概要を明らかにしており，一地方銀行史にとどまらず山梨県銀行史となっている。

また第十銀行，山梨中央銀行の具体的な業務内容の分析によって，県内製糸業や甲州財閥との金融関係など，地方銀行の役割の解明につとめている。この結果，編集方針は結実している。さらに財産諸表，年表も１８７ページにおよんでいる。

１００年の記念事業として，近年地方銀行史が数多く刊行されているが，本書はそのなかでも，きわめてすぐれている。いままで年史が刊行されていなかったので，いっそう光を増している。

委員会事務局　財団法人　日本経営史研究所
〒102 千代田区平河町2-16-15（北野アームス）
☎ 262-1090・265-237（内 209・361）

禁・無断転載